

3 調査結果の概要

歴史ゾーンについては、基本計画の策定にあわせ、発掘調査が実施されつつある。遺構の遺存状況を確認して、基本計画との整合を図る。

3-1 調査履歴

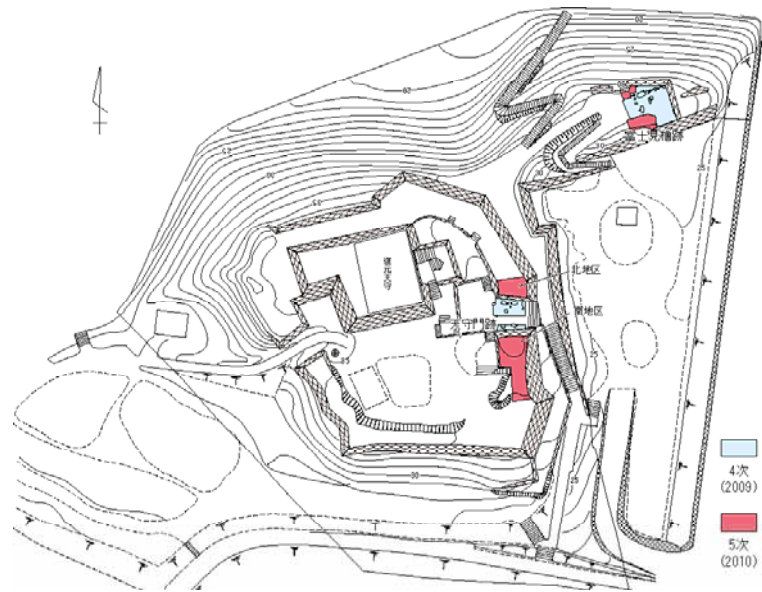
浜松城跡にかかわる発掘調査等の履歴は、下図のとおりである。天守門跡と富士見櫓跡の2箇所においては、埋没遺構の遺存状況を確認するため、平成21年（2009年4次調査）と平成22年（2010年5次調査）の2回にわたり発掘調査を行った。



浜松城跡の調査地点

出典：浜松城跡4次報告書（平成22年3月 浜松市教育委員会）に加筆

3-2 天守門跡・富士見櫓跡調査

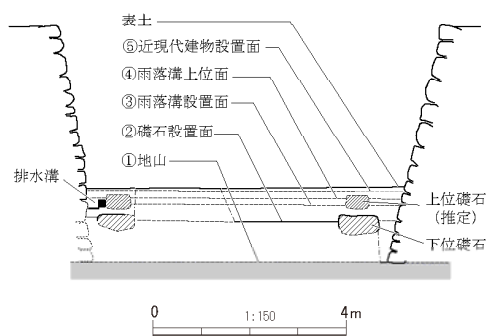
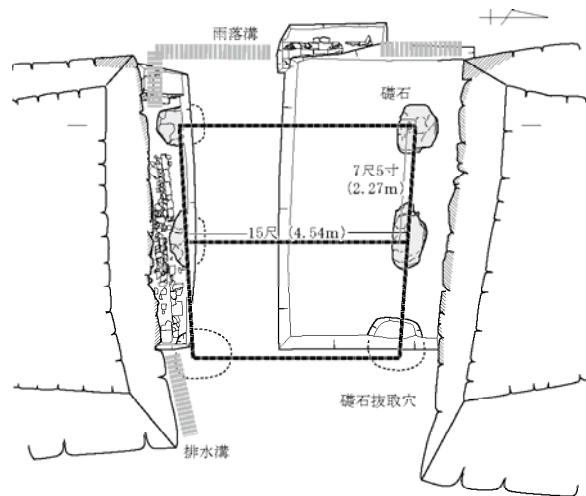


調査区位置図

(1) 天守門跡の発掘調査

検出遺構 2回にわたる発掘調査によって、天守門は壮大な櫓門であることが確認できた。1階にあたる門の部分については、2009年の調査で礎石4箇所、礎石抜取穴2箇所を検出した。4箇所残存している礎石の中心を結ぶと、天守曲輪の内側に向かって外に開く台形状の平面形となる。礎石は石垣と同様の珪岩の自然石を用い、大きさは長軸1mを越える巨大なものである。東西の礎石の中心距離は2.25~2.4mであり、7尺5寸~8尺程度を基準にしているとみられる。一方、南北の中央礎石の中心距離は4.4~4.6mであり、15尺程度を基準にしていると考えられる。

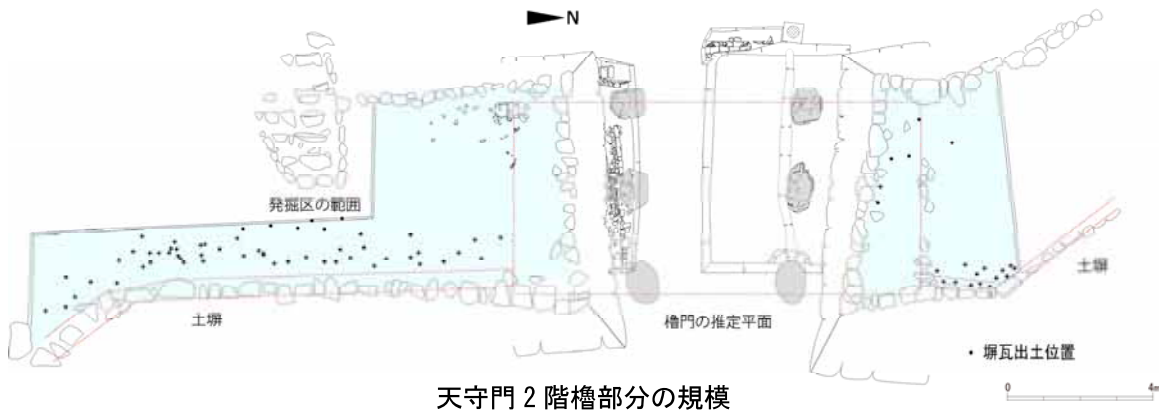
土層断面の観察によると、上述の礎石の上位に新しい時期の礎石が据えられていたことが判明する。礎石の更新に伴う天守門の建て替えがあったとみられ、下位の礎石を覆う数10cmの整地がなされたとみられる。上位の礎石はすべて抜き取られていたが、礎石抜き取り穴の底面に拳大の栗石が敷かれていた状況が観察できた。上位に設けられた礎石は、ほぼ下位の礎石と同じ位置に据えられたとみられ、天守門の建て替えによる大きな規模の変更はなかったと推定できる。瓦を用いた雨落溝や排水溝の設置は、上位礎石に伴うものと捉えられる。



天守門1階門部分の規模と層位

天守門の2階にあたる櫓部分は2010年の調査で確認した。調査区は南北に分かれるが、それぞれの調査区で櫓の基礎構造と考えられる根石列を検出し、櫓の南北幅（桁行）は、約12mであることが判明した。櫓の東西幅（梁間）は不明確であるが、1階部分の東西幅よりも大きいことが確実である。

また、石垣上の土塀にかかわる直接的な遺構は確認できなかったが、櫓の南北両脇からは塀瓦が数多く出土したことから、瓦葺きの土塀があったことがうかがえる。その出土位置は櫓の想定範囲の外側であり、瓦の分布状況においても先に想定した櫓の規模の妥当性を示すことができる。



天守門2階櫓部分の規模

出土遺物 天守門跡からは数多くの瓦が出土した。最も古いものは、堀尾吉晴在城期にあたる16世紀末まで遡るものである。また、17～18世紀に位置づけられる瓦も大量に出土している。出土瓦には、軒瓦を含む平瓦、丸瓦のほか、鯨瓦や、桐の家紋をあしらった鬼瓦が含まれる。また、軒丸瓦には歴代城主の家紋をあしらったものが知られる。



天守門跡の礎石



天守門跡2階櫓部分根石



天守門跡出土堀尾期瓦



天守門跡雨落溝

(2) 富士見櫓跡の発掘調査

検出遺構 富士見櫓跡からは北辺に礎石が3石確認できた。礎石間の距離は約2mであり、京間(1間:6尺5寸=1.97m)を用いた建築物であったことが判明する。北辺の礎石は3石分でさらに西側に続く状況は認めにくい。一方、建物が南側にどの程度あったかは、発掘調査による情報では不明である。

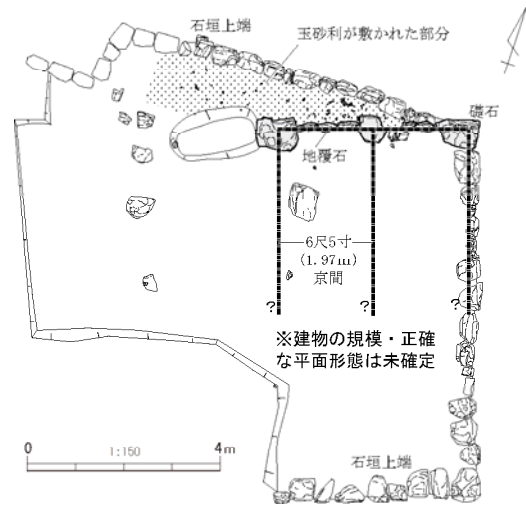
通常の土蔵造りの櫓であれば石垣上端の平面形に沿って隅が鈍角でも構わない。しかし、今回検出した礎石列は、東側石垣上端列と直角になるように設定されていた。また、検出した遺構は、通常の土蔵造りにみられる石を隙間なく並べた基礎構造ではなく、規模が大きい自然石を用いた礎石列であった。さらに、礎石の間には地覆石が敷かれている状況も確認できた。

これらのことから、富士見櫓の北側は厚い土壁を持たず、御殿風の構造であったと推定できる。建物に京間を用いていること、櫓の北側の空間には玉砂利を敷いていることなども、富士見櫓が御殿風の構造を持ち備えていたことを示す根拠になりうる。

富士見櫓の礎石検出と並行して、北側の埋没した石垣を確認した。調査の結果、北側の石垣は直線的な平面形でなく、鍵の手に折れ曲がる形状であることが判明した。この石垣平面形は、検出した建物の礎石列と不整合であり、石垣構築時と、検出した礎石を用いた富士見櫓の構築時期は異なる可能性がある。また、北側の石垣上面の列からは塀瓦が集中的に出土した。塀瓦の出土位置は礎石列に重なることから、検出した礎石を用いた富士見櫓より後の時期に、北側石垣に沿って土塀がめぐっていた可能性が考えられる。

いずれにせよ、富士見櫓の建築時期や規模については不確定要素があり、旧態を想定することは難しい。

出土遺物 富士見櫓跡からも鯨瓦を含む数多くの瓦をはじめ、若干の陶器片や鉄製品が出土した。出土した瓦には、堀尾吉晴在城期に遡るものが知られ、富士見櫓についても16世紀末に既に存在したことが判明する。一方、検出した礎石列の周囲から出土する瓦の多くは、17世紀中葉～18世紀にかけてのものであり、礎石列に伴う建物の建築年代をうかがう定点を示している。また、16世紀末～17世紀初頭頃の天目茶碗も出土している。



富士見櫓の規模





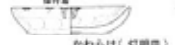





















富士見櫓跡の礎石と地覆石



天目茶碗



鯨瓦

西暦	城主	地域の支配者	関連出土品	2009年出土品		
1565	飯尾賢達・乗達・運電	今川氏	 かわらけ(灯明皿)	天守門跡	富士見櫓跡	
1570	徳川家康		 かわらけ(灯明皿)			
1590	(城代) 菅沼定政	徳川氏	 かわらけ(灯明皿)	 かわらけ		
1600	堀尾吉春・忠氏		 かわらけ(灯明皿)			
1601	松平忠頼	豊臣氏	 堀尾期軒平瓦	 堀尾期軒平瓦	 天目茶碗	
1609	水野重仲					
1619	高力忠房			 堀尾期軒平瓦	 堀尾期軒平瓦	
1638	松平乗寿					
1644	太田資幸・資次		 太田氏扇形軒平瓦	 扇形軒平瓦	 扇形軒平瓦	
1678	青山宗俊・忠雄 忠重		 青山氏無字輪紋軒平瓦		 扇形軒平瓦	
1700	本庄(松平) 資俊・資訓		徳川氏 (将軍家)	 本庄(松平)氏九目輪紋軒平瓦	 九目輪紋軒平瓦	
1702						
1729	松平信祝・信復					
1749	松平(本庄) 資訓・資昌			 松平(本庄)氏九目輪紋軒平瓦(縮尺1/12)		
1758					 目板瓦(縮尺不図)	
1800	井上正経・正定 正重	 井上氏井桁紋軒平瓦				
1817	水野忠邦・忠精	 水野氏沢瀉紋軒平瓦(縮尺不図)		 沢瀉紋瓦の破片		
1845						
1868	井上正春・正直	 井上氏井桁紋軒平瓦(縮尺1/12)				

出土品の年代

(3) 発掘調査のまとめ

天守門は発掘調査によって櫓門であることが確認でき、1階、2階部分の規模がほぼ判明した。一方、富士見櫓については2石分の礎石が確認できたものの、正確な建物の規模や変遷、帰属時期など、その詳細について十分には知ることができなかった。